2009（平成21）年11月

AICHI UNIVERSITY LIBRARY COMMUNICATIONS 2009.11

韋編（いへん）

愛知大学図書館報

No.36

「韋編」……文字を書いた竹や木の札を、なめし皮の紐でとじた上古の書物。

大学図書館と「大学の道」へのいざない

ー「大学の道にしばし習はさむの本意」（源氏物語）ー

豊橋図書館長　和　田　明　美

1. 愛知大学豊橋図書館の現状

愛知大学図書館は、蔵書やOPACシステムの充実はもとより、他大学間相互協力と資料の共有化・データベース化等の推進により、目下、着実かつ堅実な発展の途にある。入館者は360,849名（前年度比18,167増）に達し（一日平均732名）、今春4月から7月までの利用者も、既に162,938名（前年度比715増）を数える。春学期試験前後には一日3,000人程の入館者があり、カウンター業務は多忙を極めている。

図書館ガイダンスに関しては、文学部・経済学部・短期大学部の新入生100%受講を目指すカリキュラム編成や教学指導体制等と相俟って、昨年度106回、計1,864名が講習（入門ガイダンス・入庫ガイダンス・データベース講習会・専門ゼミガイダンス等）を受けるに至った。図書館スタッフも、159万冊を優に上回る蔵書と十数の貴重文庫を擁する愛知大学図書館が身近な存在となることを願って、文献資料やデータベース等をフルに活用してのキャンパスライフサポートに徹している。平日夕刻より閉館9時まで、土・日開館日には、一般市民や社会人が20名前後訪れ、夏休みの地元高校生の利用も少なくない。現に、昨年度の館外個人貸出し6,570冊の一割は、一般社会人によって占められている。

特色ある文庫の価値も、昨今改めて見直されつつある。昨年度末には、「東亜同文書院・東亜同文会雑誌記事データ」を、皓星社の「雑誌記事索引集成データベース」へ提供するに伴い、1アクセスの条件で5アクセスの提供を受けるという恩恵に浴した。東亜同文書院関係の「霞山文庫」は勿論のこと、日中戦争関係の「江口文庫」の閲覧希望者も海外にまで及び、閲覧件数も増加している。とりわけ、今春3月シカゴ大学（アジア学会）での藤田佳久教授や成瀬さよ子氏らによる、東亜同文書院についての報告並びに「霞山文庫」関係出版物の展示は、国際的にも脚光を浴び、朝日・読売・中日新聞等の紙面を賑わせた。

2. 「大学の道」と大学寮

今日、大学（短大含）進学率は76%と飛躍的な伸びを見せている。リーマン・ショックに端を発した昨秋からの金融破綻と経済危機、また今夏の総選挙後の政界の大変動の煽りを受け、本来就職予定であった高校生が進学を希望するケースも生じているようである。国際的水準を下回る日本の奨学金制度を完備するならば、大学や大学院への進学率はさらに増加するであろう教育・研究界の現状の一端が露呈されている。実際、経済協力開発機構09年版『図表でみる教育』によると、教育支出に占める日本の「私費負担」の割合は33.3%で、OECD平均の15.3%を大幅に上回っている（公的支出は国内

総生産比3.3%で28ヵ国中27位)。

世の中が混迷し迷走する暗澹たる時代であるがゆえに、人々は知識と教養、文化と科学に依拠しつつ、確たる指針を持って生きることを切望するのではないだろうか。むしろ、人類の歴史的遺産と叡智に学び、未来を展望することの重要性を本能的に察知しているとも考えられる。時代はまさに「知の力」を求めているのである。知性と教養を涵養し「知の力」を培いうる大学に、大いなる期待を寄せていると言っても過言ではない。その一方で、激動の21世紀中盤を展望した「時代の要請」に応えられない高等・専門教育機関は、古代律令国家体制における「大学寮」と同様の運命を辿るより他ないと推察される。

古代日本の律令制度の下での高等教育は、「大学寮」で行われていた。その起源は天智朝にまで遡る。官人養成機関としての機能を果たす必要に基づき、大宝・養老令において制度的に整備されたのである。「紀伝」(漢文学・中国史)「明経」(儒学)「明法」(法学)「算」(数学)の四道(四学科)制の確立は、貞観年間(859～877)においてなされた。また、平安前期には「紀伝道」への志願者が増加し、「文章生試」や「寮試」等の選抜試験も実施された。『日本紀略』には、「斉世親王於大学寮始読書。即召得業生以下生徒三百許人」(宇多天皇・寛平八年二月条)とあり、およそ300人の学生が学ぶ高等教育機関として、官人はもとより菅原道真(紀伝道)等多くの学者を輩出したのである。

『源氏物語』の「少女(をとめ)」の巻には、「大学寮」に関連して、「大学」「学問」「学生」「入学」「寮試」「才」「師」「博士」等の語が続出する。光源氏は、わが子夕霧の元服(12歳)に際して、自らの人生を省察しつつ人間形成にとって何が重要であるのかを見極め、一方では政界の重鎮たるに必要な学問的良識を尊ぶ見地に立つ。四位であってしかるべき位も六位とし、「大学の道にしばし習はさむの本意(ほい)」に従って夕霧をあえて大学(大学寮)に入学させたのである。さらに、当該巻には「大学寮」の隆盛についての次のような叙述も見られる。「昔おぼえて大学の栄ゆる頃なれば、上中下(かみなかしも)の人、我も我もとこの道にこころざし集まれば、いよいよ世の中に、才(ざえ)ありはかばかしき人多くなんありける」(少女)。

しかしながら、「大学寮」は平安時代後期には衰退し、やがて火災や暴風による損壊も修復されることなく、治承元年(1177)の大火に伴い消滅する。「大学寮」の試験制度や教学体制・機能が形骸化し、時代の変化に対応しえなくなった時、必然的にその終焉をむかえるのである。久木幸男氏の「大学寮衰退要因は、その盛況の中に既に胚胎していた」(『日本史広辞典』1997山川出版社)との言は、正鵠を得ているのみならず、今日の大学に対する警鐘とも解される。

3. リカレント教育と大学図書館

18歳から22歳前後の学生のみならず、中高年・シルバー世代の知への欲求も高まっている。実際、大学・大学院への社会人入学者やオープンカレッジ・大学内外の公開講座等への参加者数は、退職後のシニア世代が現役世代をはるかに上回っている。自己の知的好奇心や探究心に従って、心豊かに生きることをセカンドライフの第一目的とすることが、近年の生涯学習・リカレント教育推進政策の下で可能となりつつある。しかも、ボーダレスな社会現象は、大学キャンパスの教育研究領域にも影響を及ぼし、大学における高等専門教育と研究領域のボーダーラインの緩和を要求しはじめている。即ち、生涯学習バックアップ支援体制の強化は、大学はもとより、その付属機関である大学図書館にも課せられた社会的要請と看做されるのである。

アカデミズムの扉を積極的に開くことへの社会的要請に、愛知大学図書館はどう対応するのか。何よりも、「知の枢要」としての機能を果たすべく、高度情報化社会の大学図書館としてのクオリティの向上を目指さなければなるまい。その場合忘れてはならないのは、地方都市の文字文化の枢軸としての役割である。東亜同文書院以来の価値ある伝統を継承しつつ、グローカルな見地に立って受容・開放・充実・発展を図る必要がある。地域社会との連携を一層強化し、地方都市文化の発展のために、市民図書館との相互協力・補完事業を推進することも肝要であろう。組織・体制・機能の形骸化やマンネリズム、時代の要請からの乖離により、平安時代後期に衰退・消滅した「大学寮」の歴史の教訓に学びつつ、微力ながら鋭意努力したい。

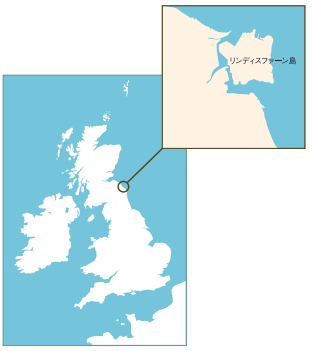
『リンディスファーン福音書』
英国八世紀初頭の極彩色写本

国際コミュニケーション学部教授　　田本　健一

愛知大学豊橋図書館には、『リンディスファーン福音書』のレプリカがあります。レプリカといっても、本学のものは、カヴァーの金銀宝飾細工、各ページの色具合、しみの類まで、本物そっくりに制作された超豪華本です。本物は、ロンドンの大英図書館1階のかなり照明を落とした陳列室で、ガラスのケースに収納され、一般に公開されています。開いた状態で展示されておりますので、その開かれたページしか見ることができません。勿論、手にとって見ることもできませんし、カヴァーの状態も分かりません。それが、本学のレプリカではできるのです。

この写本の制作年代として、10年ほど前までは698年が通説となっていました。それが、今では、大英図書館彩色写本管理官ミシェル・ブラウン氏提案の720年頃という説が有力になっております。ブラウン氏の説によると、『英国人の教会史』で有名な尊者ビード(the Venerable Bede, 673?-735)が写本制作に関与していたらしいとのことです。我が国の『古事記』や『日本書紀』の撰上の頃です。『リンディスファーン福音書』に代表される高度な写本文化の背景には、どのような歴史、社会があったのでしょうか？

まず、写本の名称となっているリンディスファーン(Lindisfarne)から見ていきましょう。



スコットランドとの境界線で、イングランド寄りの東側に小さな島があります。リンディスファーン島です。そこで制作された写本なので『リンディスファーン福音書』と呼ばれているわけです。ここは、島といっても一日に二度、干潮時には道路が現れ、英本土とつながります。このことは、尊者ビードが『英国人の教会史』の中で言及しておりますので、『リンディスファーン福音書』が制作された頃もそのような状態であったことはまちがいありません。この島には、リンディスファーン修道院があって、ノーサンブリア王国(アングロ・サクソン七王国の一つ)における北方キリスト教文化の中心地の一つとなっていました。修道院が創設されたのは635年頃のことでした。当時のオズワルド王は、異教的傾向がキリスト教に紛れるようになったことを憂い、キリスト教再興のために、スコットランド南西海岸沖、マル島(Mull)の南西沖にあるアイオーナ(Iona)島の修道院(アイルランド系)に宣教団を派遣してくれるよう依頼しました。一行を率いてやって来たのは、聖エイダン(St. Aidan)でした。その聖エイダンが宣教の本拠地として選んだのがリンディスファーン島であり、そこに修道院を建立したのです。その後、メルローズ(Melrose)の修道院で修業していたカスバート(Cuthbert)は、リンディスファーン島に派遣され、教区の改革に努め、685年にはリンディスファーンの司教に叙階されました。この聖人は、数々の奇跡を起こしたことで有名です。このように、北方キリスト教には、アイリシュ(ケル

ト）系の影響が濃厚に及んでいることが分かります。このことは、写本に見られるケルト模様、装飾の謎を解くカギとなるのです。

誰が、何の目的で、このような豪華な写本を作ったのでしょうか？そのヒントは、写本の奥付にあります。四人が関与しております。ラテン語の四福音書（マタイ、マルコ、ルカ、ヨハネ）を書き写して、飾り文字、クロスカーペット・ページの装飾、そして四福音史家のイコンを描いたのはエアドフリス（Eadfrith）という修道士（リンディスファーンの司教）でした。製本の作業を行ったのは、エゼルワルド（Ethelwald）で、カヴァーに金銀宝飾の細工を施したのは、ビルフリス（Billfrith）という隠修士でした。最後の一人はアルドレド（Aldred）という司祭で、950～970年に当時の英語で行間注を付けたのです。その行間注はラテン語本文の一語一語に対して付けられたもので、後に、17世紀のアングロ・サクソン語彙集編纂のための重要な資料となりました。何のために作られたのか、ということになりますが、聖カスバート（687年没）と深い係わりがあるとされております。カスバートが聖人に列せられるのを記念して制作されたということです。因みに、聖カスバートの聖遺骨は今では、ダラム（Durham）の大聖堂のイースト・エンド近く、ハイオールターの下に埋葬されております。

写本の材質は、ヴェラム（vellum）というものです。上質の羊皮紙のことです。子牛の皮を薄くなめしたものですが、破れにくく、なめらかで、表、裏両方に書くことができます。リンディスファーン写本の場合は、129頭の子牛の皮が必要であったとのことです。当時は、動産としての家畜を意味する英語feoh［フェオホ］には“貨幣”の意味もありました。129頭の子牛というとどの位の価値があったのでしょうか？一説によると、高位貴族が戦いで囚われの身となった際の保釈金に相当するとのことです。

絵の具の原料には様々ありますが、特に青色の原料について触れておきましょう。聖マルコのイコンで（folio 93v）、聖人が座っているクッションは青い色です。これはラピス・ラズリ（lapis lazuli）という準宝石を砕いたものを原料としております。アフガニスタン産が有名ですが、8世紀初頭には英国で入手できていたことになります。

folio 93v

folio 29

最後に、装飾文字のことです。Folio 29は、マタイの福音書第一章第十八節の前半部分です。Christi autem generatio sic erat. Cum esset desponsata mater eius Maria Ioseph...（イエスキリストの誕生の次第はこうであった。母マリヤはヨセフと婚約していたが…）というテクストです。これは、いわゆるクリスマス・ストーリーの初めの部分です。あまりにも装飾を凝らしているので、読みにくいのではないかと思います。最初の文字は“Ch”ではなく、“X”です。これはギリシャ語の“カイ”です。従って、次の文字“P”は、ギリシャ文字“ロー”です。その次に来るはずの“IST”が省略されて、最後の語尾“I”（たぶん“イオタ”）が続いております。つまりXPIで“Christi”ということになる訳です。これらの3文字が組み合わせ文字（monogram）を構成し、ページの上半分を占めております。ノット・インターレース、ペルタ、スパイラル、図案化された動物画などが独特のケルト模様となって、文字や縁取りを装飾しております。さらに、ディミヌエンド（diminuendo）という手法のため、残りの文字は徐々に小さくなっているのが分かります。非常にダイナミックな構図になっております。

（The pictures of the front cover, folios 29 and 93v are photocopied and reduced from Janet Backhouse, *The Lindisfarne Gospels* (Oxford: Phaidon 1981, repr. 1991)）

我が心のすみか、大英図書館

経済学部教授　　早川　勇

イギリスで有名なスーパーマーケットのセインズベリーには日本の食材が多く並んでいます。tofuも簡単に買えます。十年前に売られていた豆腐は食べられたものでなかったのが、最近のものは完全にパックされていても結構おいしいのです。tofuはほとんどのイギリス人が知っている日本語です。この語以上に知られている日本食材があります。soy sauceです。このソースが日本のものだと知るイギリス人は多いでしょう。しかし、soyが日本語語源の語彙であることを知る人は少ないと思います。それどころか、日本人でも知らない人が多くなっています。soyはもともと「醤油」のことです。この語は、オランダ語を通じて18世紀にイギリスに渡ったと思われます。ところが、この語がイギリス人によって使われるうちに意味が変化してしまいました。soy, soyaは醤油の原料である「大豆」の意味で使われることが多くなったのです。soy beanは「大豆」で、soya milkとは「豆乳」のことですし、soya burgerは「豆腐バーガー」のことです。

これらの語を含め約1,500の英語に入った日本語語彙の文献調査を行うために私はほとんど毎日一年間、大英図書館に通いました。図書館は十年前には皆さんご存じの大英博物館のなかにありましたが、今はそこから少し離れたキングズクロスというところにあります。ここにはユーロスター乗車のセント・パンクラスの駅もあります。世界一といわれるこの図書館で、私はウイリアム・アダムズから現在に至るまでの日本に関する文献に現れる日本語語彙の調査を行いました。中心は日本の幕末から明治期における文献です。大英図書館はその作業をするのに最も適した場所です。

大英博物館が入場料なしで展示物を公開しているように、大英図書館も世界のすべての人々に無料で門戸を開放しています。十年前は学者や作家しか入ることができませんでしたが、今は学生や一般の人も入場できます。常設の貴重本（マグナカルタなど）の展示だけでなく、定期的にテーマを設け展示会も催しています。現在では、大英図書館は研究者の研究調査の場所というだけでなく、子供や老人を含めた教育の場であり、ロンドンの観光名所の一つでもあります。

ここではすべての文献を見ることができます。明治初期に一人で東北地方などを旅行した女性バードの書籍も簡単に見られます。1727年に英語版がでたケンペルの『日本誌』はもちろん、アダムズの日記だって手にとって見ることができます。私の専門領域にはいる日本初の英和辞典『英和対訳袖珍辞書』もあります。ここにしかない貴重な資料を自由に閲覧できます。ただし、監視はかなり厳しく、閲覧室には必要な物以外は持ち込めません。筆記道具は鉛筆以外認められていません。最近はほとんどの閲覧者がパソコンを持ち込みます。パソコンを一日中使っても、そこでインターネットを利用しても、電気代や利用料金を請求されるわけではありません。

日本に関する膨大な英語資料が大英図書館にはありますが、それに匹敵する資料を保有する図書館が日本にもあります。それは京都にある国際日本文化研究センターの図書館です。多額のお金をかけ極めて精力的に資料を収集しています。見方によってはここは大英博物館より優るかもしれません。私も数年前に訪ね利用しました。それだけの資料が所蔵されているのであれば、ロンドンまで行く必要もないと考えられる方も多いでしょうが、決してそうではありません。日文研の資料は研究所員には利用が比較的自由なようですが、外部の者には利用がかなり制限されています。私の調査にはほとん

ど使い物にならないというのが実情です。宝の持ち腐れというのは言い過ぎでしょうか。資料が利用されれば、それだけ本は痛みます。しかし、それを恐れていては図書館が公に開かれているとはいえません。大英図書館はそれを恐れず、必要なものは日々補修しています。日文研の図書館は旧大英図書館の丸天井を模したようですが、その精神は学んでいません。

大英図書館には10近い閲覧室があります。それぞれが分野や調査内容によって分かれています。私は「アジア・アフリカ閲覧室」を主に利用しました。特大の机と椅子が60席ほど用意されています。この室を利用する人の約3分の2がインド人やインド研究者です。彼らは、インドが植民地であった時代の生の資料を掘り起こしています。残念ながらこの室で日本人の姿はほとんどみかけません。日本を研究している人もほとんどいません。ただし、ロンドン大学で教鞭をとり中世日本の宗教を研究する女史の姿をみかけました。「アジア・アフリカ閲覧室」には常時8人前後のスタッフがいます。入口の出入りを監視する者、本や文献を整理する人、貸出返却を担当する者、利用状況を監視して回る人、そして専門的な質問に答えるレファランス担当者です。これらの人々の仕事は厳密に分かれています。どんなに貸出返却のところで利用者が列を作ろうと、レファランス担当者は絶対に手助けすることはありません。彼らは多くの場合、かなりの高学歴者で博士号を取得する者も多いと思われます。彼らは必ずネクタイをし、専門的な質問にてきぱきと答えています。その姿は自信に満ちあふれ、好感がもてます。

稀覯本はここでは見られません。日記や原稿を見る時には「貴重本閲覧室」に行かなければなりません。そこで私はケンペルやティチングらの著作を見ました。その室ではEighteenth Century Collections Online（ECCO）も利用できます。これによって大英図書館やオックスフォード大学ボードリアン図書館などが所蔵する18世紀文献をオンラインで見ることができます。すべてデジタル化されていますので、コピーは容易にできます。また、すべての文献のすべての頁を語彙検索することも可能です。もちろん、完全にすべてを読み取ることができるわけではありませんが、とても便利です。これを利用して、私はジョンソン辞書関係の文献を100以上もコピーしました。また、大きな古地図を見るにはそれ専用の閲覧室に赴かなければなりません。最近では、音楽やフィルムの保存にも精力的で、それぞれ専門の室があります。調査の必要があり、「自然科学閲覧室」を訪れました。室内は「アジア・アフリカ閲覧室」とまったく違った作りで書籍も異なった配置となっています。利用者や利用の方法などを考慮し、分野ごとに配置を変えているのです。それぞれの閲覧室のレファランス担当者の意見が強く反映されているにちがいありません。

大英図書館には私のお気に入りの場所があります。最上階の一番奥にある秘密の部屋です。ソファーが3つ置かれています。私はお昼になるとそこへ行って、持参のスコーンなどを優雅に食べていました。「現代のマルクス」と私が呼ぶ老人がいつもここで本を読んでいます。ここは「フレンズ・ルーム」と呼ばれる交流とくつろぎの場所です。私は大英図書館の会員になりました。ここは会員だけが利用できる場所です。お世話になった図書館に多少とも寄与したいと考え、なにがしかのお金を寄付しました。

私は英語に入った日本語語彙の歴史辞書を編纂中です。私の仕事はほぼ完成に近づいています。A 4の様式で千頁を超えてしまいました。この辞書を検索すれば、どんな日本語が英語に入り、どの時代にどんな風に使われたかがわかるようになっています。それは、辞書の形をとった日本文化や歴史の体系です。この辞書には古くから使われているbonze, moxaも登場しますし、私の世代を反映するZengakuren, minamataも出てきます。日本経済を象徴するkaizen, kanbanも収録します。そして、最近のanime, otaku, kawaiiにも言及せざるをえません。大英図書館がなかったら、この辞書の編纂は容易なものではなかったと思います。その感謝の気持ちを違った形でも示したいと考えています。この図書館にはちょっと変わった貴重書保存の制度があります。ある特定の貴重な書籍を保存するのに、個人としてお金を提供するというものです。私はその制度に参加したいと考えています。

近代の西洋人による中国語研究と原典コレクション

Western studies of the Chinese language（全15点）

国際コミュニケーション学部准教授　　塩山　正純

愛知大学図書館では、昨年度末に文科省の補助を得て、近代の西洋人による中国語研究関連の原典コレクションを購入し、本学図書館の関連蔵書が大いに充実しました。これを機会に、近代西洋人による中国語研究史の研究と、本コレクションについて簡単に紹介したいと思います。

近代中国における西学東漸は、西洋文明・文化受容の過程であり、東西間の言語文化接触の影響を抜きにしては語れません。そして、来華キリスト教宣教師の「英華・華英字書類の編纂」、「中国語研究書」、「聖書の中国語訳」に代表されるように、中国語に「文化の受容と語彙の創造」の面で大きな影響をもたらし、中国語研究にも大きな成果を残しました。

近年、近代中国における東西言語文化接触に関する研究が国内外で盛んになりつつあります。近代西洋人による中国語研究の著作は、現在の中国語研究においても、中国域外の周辺資料のひとつとしてとくに重視されていますが、それには幾つか理由があります。まず欧州では早くから言語学・文法学が確立していたこと、非母語話者が客観的に記述していること、アルファベットで中国語音を記録していること、そして研究者の多くが基督教宣教師であり彼らが中国語の官話と方言を明確に区別して認識していたこと、などが挙げられます。

国内では1950年代にはすでに香坂順一、太田辰夫、尾崎實の各氏らにより欧州資料を用いた研究が始められていました。最近になって漸くこうした周辺資料による近代中国語の研究が重視されるようになり、例えば、関西大学の内田慶市教授のグループがCOEで、近代中国語研究資料データベースの構築に取り組んだりしています。海外でも、中国は北京外大の張西平教授、ドイツはエアランケン大学のラックナー教授、イタリアはローマのマシーニ教授などのグループが、同様に精力的な研究活動を展開しています。

愛知大学では、このような派手な研究活動はないものの、ライヒマン文庫をはじめ、欧米の近代中国研究の文献を多数収集してきました。近代中国語関係の蔵書は充実しているとは言えませんでしたが、荒川清秀先生が近代日中学術用語の形成と伝播、故那須雅之先生がロプシャイトの字典を研究テーマとされ、筆者も西洋人の近代中国語研究をテーマとしていることから、中国語訳聖書の原典から、字典、中国語文法書まで、原典資料の収集をこつこつと続けてきました。そして、現在では、近代西洋人による中国語研究の著作の原典を系統的に所蔵する数少ない大学図書館のひとつになっているといえます。例えば中国語研究書だけでも、以下のように18、19世紀の重要な著作が揃っています。

1) Linguae Sinarum Mandarinicae Hieroglyphicae Grammatica Duplex
（中国官話Fourmont, 1742）
2) Elements of Chinese Grammar
（中国言法Marshman, 1814）
3) A Grammar of The Chinese Language
（通用漢言之法Morrison, 1815）
4) Elements de la Grammaire Chinoise
（Remusat, 1822）
5) Arte China（漢字文法Goncalves, 1829）
ゴンサルベス1829
Vocabularium Latino-Sinicum
（辣丁中国話本Goncalves, 1836）
6) Esop's Fables Written in Chinese by The Learned Mun Mooy Seen-Shang
（意拾喩言Thom, 1840）

そこに今回の新規コレクションが加わったというわけです。本コレクションはこれまで集めてきた資料に比べて、一つ一つはやや地味であることは否めませんが、既存の蔵書の空白を埋めて全体をより充実させる重要な役割を持っています。ここからは新規コレクション(全15点)の代表的なものを紹介しましょう。

まず、A Historical Essay Endeavoring A Probability That The Language of The Empire of China in The Primitive Language (Webb 1669) は中国語を通時的に記述したエッセー集で、西洋人による中国語研究で1600年代の資料は、愛大これまでに集めていなかったものです。

つぎに、Linguae Sinicae (1831) はリプリントですが、これで18世紀初期の中国語研究の重要な資料のひとつであるプレマールの著作、Notitia linguæ sinicæ (1720) が加わりました。

Miscellaneous Pieces Relating to The Chinese (Thomas Percy 1762) は中国語に関する種々の事象について記述したものです。

Dissertation on The Characters and Sounds of The Chinese Language (1809) は、マーシュマンの中国語の文字と音声に関する研究書で、大著『中国言法』の出版前段階の重要な著作の１つです。

A View of China (1817) と Chinese Miscellany (1825) はいずれも、初めて聖書全文の中国語訳を完成したモリソンによる中国に関する概論と文字の概説書で、その中国語研究のうちでも有名かつ重要な著作です。

Grammatica Latina (辣丁字文1828) はポルトガル人宣教師ゴンサルベスの、中国語によるラテン語文法書で、ラテン語中国語対訳の会話練習部分は当時の口頭語の重要な資料です。

Lexicon Magnum Latino-Sinicum (辣丁中華合字典1851) も同じくゴンサルベスの著作で、こちらはラテン語中国語字典です。このほか、豊橋図書館はすでに Arte China (漢字文法1829) と Vocabularium Latino-Sinicum (辣丁中国話本1836) を所蔵しています。

Chinese Chrestomathy in The Canton Dialect (1841) はブリッジマンによる広東語教本ですが、その内容は中国の民俗、階層、商務、産業、芸術、地理、動植物、薬学、政治など多岐にわたります。中国語の学習にとどまらず、中国に関する概説書としての価値が高い資料です。

Notices on Chinese Grammar (1842) はギュツラフによる中国語文法書で、これも19世紀における西洋人による中国語研究の重要資料の１つに数えられています。

An English and Chinese Vocabulary, in The Court Dialect (英華韻府歴階1844) はウィリアムズによる英漢辞書です。ウィリアムズはまたモリソンの聖書全文の中国語訳の協力者としても知られています。

最後に、The Peking syllabary (Wade 1859) は19世紀後半の中国語研究の大家であるウェードの著作で、北京官話の音声を記述したものです。アヘン戦争を経て、当時は中国国内では南京官話から北京官話へとその優位性がシフトした時代です。ウェードには『語言自邇集』という有名な官話教科書がありますが、ちなみにその初版は世界における稀観本です。かつて本学の荒川清秀先生が所蔵しておられましたが、「よりこの資料を役立てられるひとのところにあるべきだ」と言ってその元本のひとつである『尋津録』と合わせて、ある研究者に譲られたというエピソードがあります。

以上が本コレクションのあらましですが、この全15点によって、近代中国語研究の原典資料コレクションは一段と充実しました。国内の大学図書館で、これだけまとまって所蔵しているのは稀なことで、西洋人による近代中国語研究関連著書のコレクションは、豊橋図書館の特徴のひとつになりつつあると言えます。

また、本コレクションは当時の欧米人による中国学、中国語研究の系統的な系譜を研究するための基礎文献であるばかりでなく、宗教(キリスト教)や語誌(西洋文化の受容)といった周縁分野での学際的な利用の可能性も大いにあることを付け加えておきます。

『農民も土も水も悲惨な中国農業』を書いたわけ

現代中国学部教授　　高 橋　五 郎

食料の確保やその安全性はどの国でも関心が高く、大半を輸入に頼っている日本ではとくにそうである。国内の主要な農産物需要を満たしているのはコメくらいのもので、大部分を輸入に頼っているのが現状だ。

食料は穀物、野菜や果物などの青果物、肉類やバターなどの畜産物、魚介類の4種類に分かれる。カロリーベースでみた日本の食料自給率は非常に低い。カロリーベースというのはたとえば肉類のうち牛肉や豚肉を１kg作るに必要なそれぞれ15kg、7kgの飼料穀物をカロリー換算したものを指し、自給率というのは、その投入カロリーのうち国内産の占める割合のことを指す。

輸入した穀物から加工生産した飼料の割合が大きければ、カロリーベースの自給率は低下する。このように食料自給率をカロリーベースで示すことで、食料自給率が分かる。自給率が低いことは、次の3つの点で問題だ。気候変動などが起こりやすい現在、食料の国際的争奪が起こる懸念が増していること、関連して国際価格の上昇傾向が懸念されること、食料輸入品が第一次産品の形から加工食品などに姿を置き換えて入ってくる傾向が日増しに高まり、添加物や加工過程の不明瞭さに伴う安全性への懸念などが消えないことなどである。

日本のカロリーベースの食料自給率は1965年には73%だったが現在41%にまで急落、先進国中最低のレベルで、アメリカ128%、イギリス70%、フランス122%、イタリア62%、オーストラリア237%（2003年）などは高い。

こうした過程で、日本が急速に食料依存を高めた国が中国である。農水省食料需給表によると2007年度の輸入野菜は日本の消費の約24%を占めるが、その約60%を中国に頼っているのが現状だ。中国からの輸入は生鮮野菜に限らず、あらゆる農畜産物の加工品に及んでいる。

日本の食卓が依存するその中国農村で起きていることを農民の生活、農薬や肥料、農地を利用する主体が農民から企業に置き換わっている現状、水質や土壌汚染など農村環境などに焦点に当て、一方で日本農業はこれでいいのかと訴えかけたのが高橋『農民も土も水も悲惨な中国農業』（朝日新書、2009. 2）である。

農村調査マンの私にとって大きく変化する中国農村の現状をつぶさに観察することは、中国そのものの変化を観ることと重なるが、同時に様々な国の農村を歩いた経験のある私にとって、中国農村は特別なものではなく、多くの面で他の国と共通な面を持っていること、しかし中国だけの特殊な面を観ることでもあった。

共通することは、自らの農業経営に展望を持てない小農民の姿 、そして土地所有制度や農産物価格制度、農業政策の遅れや先進国産農産物との競争の激化などであり、中国の特殊な面はといえば“農業竜頭企業“といわれる生産から加工、輸出まで行う企業によって農地を手放して一人の農作業労働者となった農民の姿とその増加、若者がほとんど消えた農村の全国的な拡大である。日本でも若者の農業就業率は低いが、中国では日本よりも深刻さを増している。

中国農民は農地に愛着を持てないので若者は農村から去り、子のために親もそれを進める。跡継ぎの概念がないから、それで、親もむしろ安心なのだ。日本の農家のように”先祖伝来の農地“を守る義務も制度もないから、息子や娘はすぐに農業から足を洗える。しかし、働き手を失ったこの先、中国農業はどうなるのか。

拙著はこれらの問題に対する警告の著でもある。結局、このような不安を抱えた中国農業に依存する日本の食卓の問題であり、ひ弱な日本農業の問題でもある。

この本の中で私がおこなった最大の主張は、中国も日本もまず農地制度を変えよ、ということである。つまり中国は農地を農民個人の私有制に、日本は農地を企業や農業に夢を持つ普通の人々が持てるように、制度を変えることが喫緊の課題である。

私と日本語の図書との出会い

嘱託助教　　焦　毓 芳（上海外国語大学）

今年の夏、上海展覧センターは人で賑わっていた。赤い風船、赤いリボンと赤いアーチ門が溢れ、「読書好き・生活好き」をテーマにする2009年上海ブックフェアが盛大に開幕した。一週間にわたるこのブックフェアは、販売2800万元、入場者24万人という記録を残した。特に中国でも絶大な人気を誇る渡辺淳一氏がサイン会を開催して、会場ではフロアからあふれたファンが階段にも長い行列を作る騒ぎとなった。そのファンの一人として私もそこにいた。私は日本の小説や歴史の本が好きで、そのきっかけは学生時代に日本語の図書との出会いから言わなければならない。

大学に入って専門は日本語だから、日本語の原文書籍に触れたかった。しかし、当時の図書館はとても粗末で、蔵書も多くなかった。かたい言語学の本以外に、小説は専ら夏目漱石、島崎藤村、芥川龍之介など日本文学大家の作品ばかりであった。勇気を出して何冊か借りたが、結局「難解な書物」として、枕元に置いただけで、一冊も最後まで読まなかった。日本語のものは読みづらいと半分諦めた時、先生は教員資料室から日本語の雑誌や村上春樹、吉本ばなな、村上隆などの小説を持ってきてくださった。一部は日本から寄贈された図書で、本の最初のページに寄贈されたところが書いてあるから分かる。この本ははるか遠く異国から日本の友人の素晴らしい願望を伴って海を渡り、私の所へ来たものかもしれないと思うと、読書の情熱が高揚した。それから、みんな辞書を引きながら小説に没頭する姿は今もはっきり覚えている。村上春樹の整然として洗練された自然な筆致は何回読んでも飽きない。そして、吉本ばななのものはいつも淡々とした悲しみが漂って、読み終わったら、何か切なくて暖かいものに心が打たれた。私は先生や日本の友人に深く感謝している。彼らのおかげで私は日本語の図書に出会った。これらの本は私に窓を開いてくれた。窓の外には私のよく知らないそして夢中になる日本の世界がある。私はだんだんこの世界を理解し始めた。私たちと同様に勤勉で、喜怒哀楽に満ちた生活を送っている大和民族の人々を。

その時の教員資料室は私にとってまるで宝石箱のようであった。学生は利用できないから、いつも外から中の様子を覗いた。一列一列の書架にたくさんの言葉が書かれた一冊一冊の本がびっしり詰まって、読書の雰囲気に満ち溢れて、美しい日本語が構成する世界に私は憧れていた。いつか私もその輝かしい世界に足を踏み入れたい。その念願が叶ったのは私が教員になってからである。私は立ち去るのを忘れて、ほとんど毎日のように資料室の蔵書に向き合っていた。私は最初にその蔵書の量と種類の多さに驚かされた。言語、文学、教育、社会、経済、歴史など多くの分野に及び、百科全書や辞書類もたくさんある。その場のすべてが共同で日本という世界を築いている。その驚きと喜びを胸に、数年後、私も担任になって、当時先生のように学生に本を紹介し始めた。彼らに一つ窓を開いてあげれば、きっと私のようにいろいろ感銘を受けるに違いないと確信しているから。そして、最近、この資料室は学生も利用できるようになったという朗報を聞いた。かつてはほとんど原文書籍に触れることができず、日本語の学習といえば、教師に従って、教科書と文法を学ぶというのがすべてであった。今、これだけ多くの原文書籍が読めるようになった現在の大学生がとてもうらやましく、彼らの喜ぶ姿を想像すると私まで心から嬉しくなってきた。

実は中国の出版業界においても最近明らかな変化が見られる。これまで日本の文学といえば、村上春樹、渡辺淳一などで占められたが、最近日本でベストセラーとなった本も次々に翻訳され、翻訳のジャンルも作品の数も翻訳を手がける出版社も拡大している。本という窓口を通して、中国人の日本への関心は確実に広がっている。相互理解を促す中日の図書はこれからも大きく活躍すると思う。

「人文知」の再生を

経営学部教授　　別所　興一

1. 「知の触媒」としての読書指導

数学者の遠山啓によれば、学校は実用的な知識・技能の習得を主目的とする「自動車学校」タイプと、直接的には何の利益も生まない消費財としての「知」を味わい楽しむ「劇場」タイプに大別される。近年、日本の多くの大学は、生き残り戦略から「自動車学校」タイプを志向するようになり、その結果、文献や文化の研究を通して普遍的な価値を追求する「人文知」、いわゆる“教養”の内容が年々薄くなってきたように思われる。

その要因としては、最近の大学生は大学入学以前の学校では教師から与えられた知識・技能の習得だけに明け暮れて、主体的に本を読んだり、自然と人生をじっくり考察したりするトレーニングをほとんど体験できていないことが挙げられる。筆者たちの年代の高校生なら、特別の本好きでなくても課外読書としてだいたい読んだ文学書や人生論・青春論などを、最近の大学生はほとんど読んでいない。いわゆる一般教養書を典拠とする文章は、高校の国語の教科書でしか接したことがない、といった学生が多くなった。

それで、何が悪いのかよ、専門学科領域の問題にとり組ませるに当たってどんな不便・不都合が生ずるのかよ、という意見が出るかもしれない。しかし、少し観察すれば、教科書と受験参考書と娯楽雑誌しか読んでこなかった学生の場合、生活体験の狭さから自己中心主義になり、他人の生活、公共の世界を思いやる知的な想像力、人間の生きざま死にざまに対する共感能力が、きわめて乏しいことがわかる。また、こうしたヒューマンな基礎的能力をぬきにしては、社会科学系の専門学科は成り立ちえないことは言うまでもない。それだけに“知の触媒”としての読書指導の重要性に注目する必要があると言えよう。

大切なことは、未来に希望を持てずヤル気を失いかけた若者たちに「読んでよかった」という達成感を味わうことのできるような“場”を設定することであろう。学期に１，２冊でもよいから、本格的な古典書でなくてもよいから、学生たちの問題意識を触発するような本や文章を読ませたり、レポートを発表させたりして、目から鱗が落ちるような“発見”のよろこびを体験させたいものである。さらに、学生たちに自ら図書館に出かけて自分にとって意味のある学問情報を自分の手で検索したり、それを分析して付加価値の高い自分の納得できる情報を生産したりする訓練にとり組ませたいものである。近年、一部学生の出すレポートに、本を1冊も読まずに、インターネットの記事の切り貼りだけでやり過ごそうとする安易な傾向が見られるけれども、こうした学問的探究を怠った低レベルの“情報消費者”には、厳格に対応すべきではなかろうか。

2. 「生きることの意味」を考える本

今日の日本のように、未来という進歩の神話が破産し、目的を失った社会においては、どんなに情況が悪化しても生き延びていけるような多元的な価値観と、生き残りのためのスキルをいくつか身につけなければ、と痛切に考えるようになった。また、日々の仕事を単なる生活の手段としてではなく、自分の楽しみや生き甲斐とし、仕事もやるけれど、他の諸々

のことにも手を出す、という多面的多角的な生き方を下支えしてくれるような哲学が欲しいと思うようになった。繰り延べされた未来や遠くの目的のために現在を我慢するのではなく、現在を自分のいちばん納得できるライフ・スタイルで過ごしたい。こうした私の欲張りな願望を満たしてくれた教育書に、つい最近めぐり逢うことができた。上野千鶴子著『サヨナラ、学校化社会』（太郎次郎社）である。今日の日本の学校教育のあり方を考える際に、一読に値する本ではなかろうか。

次に、身近な地域自治体や大学が公表した巨大プロジェクトの策定経過に関心を持つようになってから遭遇した本が、山本七平著『“空気”の研究』（文藝春秋社）であった。著者の山本によれば、昭和20年春の戦艦大和の沖縄方面への特攻出撃は、軍事専門家ぞろいの海軍首脳にとって、多大な犠牲を出すだけの無謀な作戦であることが明々白々だったにも関わらず、すべての議論やデータを無視して出撃を決行したのである。その要因は、軍をとりまく当時の“空気”であった。作戦の最高責任者さえ、後年なぜそれを決行したのか一言も説明できない不可思議な拘束力を持つ“空気”であった。明治以前の日本人は、こうした“空気”への抵抗として“水を差す”ことを知っていた。昭和の戦争の悲劇の要因は、“水を差す”という平常心に基づく異議申し立てを全面的に禁圧したことにある。

こうした“空気”による日本の破滅を防止するためには、自由な思考に基づく自由な発言を保障するシステムが求められている。しかし、それには自分の精神を拘束しているものの正体を突きとめようとする探究精神、さらには現実をリアルに洞察して、“空気”による呪縛からの脱却をめざす主体的な精神の確立が必要である。それが今後の日本人の長期にわたる課題であることを、山本は訴えたかったのではなかろうか。

数日前、本屋で衝動買いし、その夜に一気読みしたのが、姜尚中著『悩む力』（集英社）である。この本は、夏目漱石とマックス・ウェーバーが約100年前に抱き、悩んだ近代社会への根源的な疑問を反芻しながら、現代社会に「生きることの意味」を考察した著書である。そこには文明が進むほどに人間の知性が断片化し、孤独感が増し、救いがたくなっていくようすが解き明かされている。でも、この生きづらい現代社会にあって、巧妙な誘惑やシニシズムに屈することなく、ひたむきに悩み苦しみながら活路を求めて努力する、その地道な精神的営みにこそ、人間の“悩む力”が結晶していることが啓示されている。

姜氏によれば、最近の若者たちの一部に、簡便な情報を入手しただけで人生とはこんなものだと浅く割りきり、よけいな心配事が生じないように、「生きることの意味」を考える読書を敬遠する傾向が認められる。特に情報技術にたけた若者たちの中には、想定外の問題にぶつかって悩むリスクを避けるために、マニュアル通りに歩く安全地帯から一歩も出ようとしない者もいる。この憂うべき傾向は、マックス・ウェーバーのいう「精神のない専門人、心情のない享楽人」に接続し、さらには上から与えられた労働に無感動に従事するワーキング・マシンに転落する恐れがある。

その打開策としては、まだ時間のゆとりのある学生時代に情報や娯楽のための読書とは別に、人文知＝教養としての読書にとり組むこと、“若年寄”的な浅知恵を排して辛抱強く情熱を持ち続けることが必要ではなかろうか。それは一見道草のように見えても、人間らしい　“悩む力”を高め、苦悩の彼方の歓喜に到達する道につながるのではなかろうか。

最後に、私の好きな亀井勝一郎の読書論の一節を紹介したい。「書を読むは憂ひの始まり、憂ひを抱くは人間の始まり」という文言である。人間性豊かで持続可能な未来社会を築くためにも、私たちは人間的な“憂ひ”を抱き続けたいものである。

豊橋図書館から移管された資料について

東亜同文書院大学記念センター ポストドクター　　武井　義和

今年6月、豊橋図書館から東亜同文書院大学記念センターへ、段ボール1箱分の資料が移管されました。1902（明治35）年から1906（明治39）年頃までの、東亜同文会京都支部、ならびに同支部が経営していた「清語講習所」に関するものが中心です。

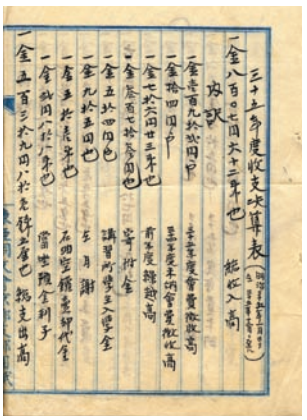
東亜同文会（1898～1946年）は、愛知大学の前身にあたる東亜同文書院（1901～1945年、1939年大学に昇格）を経営していた団体ですが、京都支部や「清語講習所」については『東亜同文会史』（霞山会発行、1982年）に断片的に現れる程度で、詳しいことは殆ど分かっていません。そのため、このたび移管された資料は、埋もれた歴史に光を当てる大変貴重なものだといえます。

資料数は整理の仕方により若干異なってきますが、現時点では273点ほどにのぼっています。分類すると①「清語講習所」関係、②出納関係、③東亜同文会入会・退会関係、④京都支部主催の談話会などの案内類、⑤名簿類などに大別されますが、これ以外にも名刺や電報などがあります。この中で特徴的なものを2点ほど取り上げ、簡単にご紹介したいと思います。

資料1は、1902年度の京都支部収支決算表です。団体の活動を知るには、収支がいくらか、どういう目的で使われたかといった予算面の考察も重要となります。したがって、この収支決算表はそうした角度から、京都支部の内実について明らかにし得る資料です。ちなみに、この年は「清語講習所」が設立されたため、支出の多くがそれに関する項目で占められていたことが確認できます。

資料2は、1902年から1904年の間に提出された、「清語講習所」への入学申込書の綴りです。これを見ると、志願者の殆どが京都市内在住者であったことが分かります。講習所は午前の部と夜間の部があり、修学期間は2年でしたが、速成科は3ヵ月で、また随時入学が認められていました。講習所自体の実態を解明することはもちろん重要ですが、入学志願者たちの職業や課程修了後の人生、受講生と教員ならびに受講生同士の人間関係（人的ネットワーク）なども、資料をもとに研究を進める上で重要な視点になるかと思います。

当分の間は保存状態を確かめつつ、さらに整理を行う関係上、未公開とさせて頂くことになりますが、将来的には何らかの形で多くの方にご覧頂けるようにしたいと思っております。



資料1

資料2

私の読書歴と職業選択

学生相談員　長尾　洋之

私は大学の秘境ともいえる学生相談室でカウンセラーをしています。突然の原稿依頼に戸惑いながら、過去の読書歴を振り返ってみると、そこに今の職業に続く軌跡を見出しました。

私には、過去、何冊も読んだなかで強烈な印象を受けた本が、小、中、高校、大学と1冊ずつあります。

最初の作品は小5の頃の「家なき娘」です。エクトール･マロー作で1893年に書かれた古典です。両親を亡くし、一人ぼっちになった少女、ペリーヌの物語。ペリーヌが湖畔の狩猟小屋でひとり暮らしをしながら、工夫を重ねて靴や肌着やスプーンを作るくだりにひどく憧れ、自分もこういう生活をしてみたい、と夢みました。

中学時代に衝撃と影響を受けた作品は、『脂肪のかたまり』です。母親の婦人雑誌に載っていた、人間の暗部と醜部をするどく描くモーパッサンの短編小説で、今、読んでもぎくりとする大人向けの内容です。この作品で、人間のエゴイズムや裏の心を知り、大ショックを覚え、複雑な人の心に関心を抱き始めたような記憶が残っています。

高校では、拷問によって殺された小林多喜二の写真集も忘れられないけれど、島崎藤村の『破戒』を必死で読みました。部落出身者の丑松の物語です。社会性のある重たいテーマですが、大学に入ると、毎日、歌を歌っていて、政治にも社会にも無関心な日々を過ごしました。

そんなある雨の日、図書館で出会ったのが『夜と霧』。ユダヤ人強制収容所の極限状況で生きた体験記録です。人の生き方や精神性に関心があった自分は強烈な印象を受け、この本はその後の職業選択に強い影響を及ぼしました。

図書館を活用して身についた能力

文学部　舟橋　大輝

図書館の1階の資格試験用図書が並んでいる参考書の棚の大きな机、そこで私は講義で出された宿題を片付ける。レポートを書くために必要な参考書をあの大きな机のそこかしこに並べ、自分の定位置に座り、愛用のシャープペンシルを持ちレポートに取り組む。つまり、その大きな机は私の勉強机なのだ。だが、実のところ私は図書館で勉強することが苦手な方であり、あまり利用することはなかった。それでも図書館で勉強しなければならない大きな理由がある。

私が所属している専攻は課題が多く、図書館にある本を使わなければいけない。また、その課題を終わらせるために必要な情報は、図書館にあり、しかも大概書庫に置いてある古い本や、教授が参考文献として寄贈した本ばかりである。そのため授業がある日だろうがない日だろうが毎日図書館に通っている。

だが、図書館で勉強するようになってから、私は少しずつ変わってきたことがある。まず1つ目は「調べ癖」がついたことである。以前は分からなければそのまま放置していたが、図書館で課題をするようになってから、ちょっとでも分からない箇所があれば、図書館にある本を使って調べたりするようになった。もう1つは「集中力」がついたことである。まったく集中力がなかった私であったが、図書館を活用するようになってから、周りで勉強している人がたくさんいるため、自然と集中して勉強をするようになった。

集中力がついても、周りに友人がいると、今でもついつい話してしまうが以前よりは減少し、なにより勉強することが習慣化され資格試験やTOEICの勉強もするようになった。その結果TOEICでは受験するごとに点数が上がっていっている。今では図書館で勉強することは日課にまでなった。これから私は教員採用試験や資格試験が控えているため、勉強することがたくさんあるが、今後も図書館で勉強し、将来の夢をつかもうと思っている。

図書館の利用方法

経営学部　斎藤　光恵

私は、特別読書好きというわけでもなく、1,2回生の頃は用事がある時以外は殆んど図書館を利用することはありませんでした。転機になったのはある授業でした。

その授業では毎回レポートを提出し、様々な国や文化について調べる必要があり、大変な作業でした。私は図書館に慣れておらず、一人ではどうしようもなかったので、職員の方に相談をしてみました。

そこで私は今までもっと図書館を利用しておけばよかったと思いました。ただ目的の本を闇雲に探すのではなく、OPACやデータベースなどを利用して効率よく検索することができ私の持っていた調べ方のイメージとは全く違いました。

また、名古屋図書館にない本は取り寄せもでき、学生の要望に出来るだけ応えようとする姿勢が窺えます。

自分一人の力で本を探すということは大切なことだと思いますが、図書館の利用方法の一つとして職員の方に相談をするという手段もあります。わざわざ職員の方に話しかけるのが恥ずかしいという方もいるかもしれませんが、そういう方は一度思い切って話しかけてみて下さい。職員の方は親身になって相談に乗ってくれ、その本を探してくれるだけではなく、これからどのように自分が図書館を利用すればよいか教えてくれます。

入学した時の説明だけでは図書館の利用方法を理解することは難しいと思います。実際の課題に取り組み体験してみて、自分のほしい情報を得るために図書館を利用できたら最良だと思います。

私はこの夏休みを利用して好きな作家の本を4冊借りました。図書館の1階には学生が読みたくなりそうな文庫本が沢山あります。専門書は苦手という人は一度図書館の1階開架室を覗いてみてはどうでしょうか。

「2,000ページの読書」

法務研究科法務専攻　西山　知宏

現在、自習室にある私の机は専門分野に関する、1冊何百ページもある分厚い本で囲まれており、読書とは切っても離れられない日々を過ごしている。将来の自分がこんな環境で生活していると知ったら、小学生の頃の私はどんな反応をするだろうか。

小学生当時の私は読書が大の苦手だった。特に長期休みの課題で読書感想文が出されたときなどはもう一大事だった。ただでさえ読書が苦手なのに、その感想を書けと言うのだから大変である。よく自己紹介の趣味の欄に「読書」と書く人がいるが、当時の私からすると、読書を趣味にしている人といったら、よほどの勉強家か、外で遊ぶことを好まない根暗な人くらいかと本気で思っていた程であった。

そんな私の極度の読書嫌いを直してくれたのは、中学1年生の時の担任の先生が出してくれた課題だった。私が先生に現代文の読解がうまく出来ないと相談したところ、「国語が得意になりたかったら、夏休み中に2,000ページ読書をしなさい。好きな本でいいから。」と個人的に課題を出してくれた。そして何を読んでいいのか困っていた私に1冊の本を薦めてくれた。それは『エーミールと探偵たち』という児童向けの小説であった。最初は騙されたつもりで読んでみようと読み始めたが、読み進めると意外に面白く、あっという間に1冊を読み終えてしまった。私はこの時、生まれて初めて本を読むことが楽しいと感じた。それから文庫版の小説などで興味のあるものを読んでいくと、いつの間にか先生と約束した「2,000ページ」という目標に到達していた。その時に味わった達成感は今でも忘れられない。また、それと同時に自分の読書嫌いは単なる食わず嫌いだということに気がついた。そして、自分の知的好奇心を満たす為にする読書がどれだけ楽しいものかを少しは理解できた気がした。

現在、私に日々課される難解な専門書の読解は、正直楽しい読書とは言い難い。しかし、ときどきそこに書かれていることを自力で理解できたときには、他にない悦びを感じる。これも「2,000ページの読書」のお陰かもしれない。

シリーズ学会紹介　その③

法学会常任委員　　広 瀬　裕 樹

愛知大学法学会は、主に法律学・政治学の研究およびその発表を促進することを目的として、1949年(昭和24年)に創設されました。

もともと愛知大学の法学部(1989年までは法経学部法学科)は、東海地区の法学部の中では最も古くからあります。そのため、法学会も大変に長い歴史を持っています。

大学は、高度な専門教育を施す機関ですが、それだけでなく、学術研究を行う機関でもあります。もとより、高度な専門教育を成立させるためには、学術研究の基盤が絶対に必要です。学術研究を深めることにより、学生の皆さんに対して、質の高い内容を教育することができるのです。さらには、その学術研究の成果が社会に浸透していくことで、社会全体の発展にも寄与しうると期待されています。大学が大学たり得るのは、学術研究の礎があるからだと言っても過言ではありません。

法学会は、長きにわたり、愛知大学における法律学・政治学研究の中心でした。

その主たる活動は、次の4点です。

まず第一の活動として、研究紀要である『愛知大学法経論集』を年に4回刊行しています。この研究紀要は、論文などが掲載されているもので、2009年8月刊のもので181号を数えます。

『愛知大学法経論集』は、長らく、本学の先生方の最新の研究成果を掲載し続けてきました。その歴史の長さも相まって、学界の中でも一目置かれる存在です。

法学会の活動の第二は、専門的な雑誌類・データベースの購入です。例えば、法律学の専門誌や、各種の判例集、判例のデータベースなどを購入しています。他大学の研究紀要なども、まずは法学会に所蔵されます(ただし、古い号は図書館にて所蔵して頂いています)。

法律学・政治学における研究を行うにあたっては、こうした専門的な雑誌類が必要不可欠の基礎資料となります。法学会では、重要な基礎資料である雑誌類を、400種類近くも所蔵しています。

このように、法学会では、研究の基礎を支援しながら、成果を公表する道も確保し、愛知大学の法律学・政治学研究の最も重要な部分を担っているわけです。

さらに、第三の活動として、学会・研究会・講演会などの助成を行っています。

2009年度でいえば、5月1日に「ドイツ刑事法廷における答弁取引」という公開講演会を主催しました。秋には、悪質商法に関する公開講演会の開催を予定しています。また、毎年12月に行われている「模擬裁判」を、法学部と共催しています。

このように、法学会は、先生方の研究成果を一般の皆さんに還元する活動も支援しています。

第四の活動として、優秀な卒業論文に対して「学会賞」を付与しています。その受賞者に対しては、毎年、卒業式において賞状と記念品を授与して表彰しています。大学生活の総決算の場で、名誉が讃えられるわけです。

実は、法学会は、教員だけのものではありません。学生も、「学生会員」として、法学会の正式な構成員なのです。ですので、『法経論集』は無料でもらえますし、また、法学会の部屋にて、たくさんの専門雑誌に目を通すことも可能です。

法学会の部屋は、法学部の3・4年生が所属する車道校舎にはありませんから、利用するには少々敷居が高いかもしれません。そのためか、卒業論文の執筆者が年々減少し、残念ながら、最近は「学会賞」の受賞者がいない年度が続いています。

学生の皆さんには、法学会の存在意義をよくご理解頂くとともに、法律学・政治学の勉学をより深めるために、法学会を是非とも活用してもらいたいと思っています。

編集・発行　愛 知 大 学 図 書 館　2009年11月15日発行　No. 36

■豊 橋 図 書 館　〒441-8522　豊橋市町畑町字町畑1－1　☎(0532) 47－4181
■名古屋図書館　〒470-0296　西加茂郡三好町黒笹370　☎(0561) 36－1115
■車 道 図 書 館　〒461-8641　名古屋市東区筒井二丁目10－31　☎(052) 937－8116
URL　http://library.aichi-u.ac.jp